

「森を探して草原に出会った」 変貌した茅場の再生を継続中

2002年晩夏、森林環境保全活動に興味を持つ都市住民を中心とする10人ほどのメンバーが、現在の群馬県みなかみ町藤原の上ノ原でススキ草原（茅場）に出くわした。背丈を越すススキの茂みに分け入り、みんなで小躍りした。故郷の原風景ともいうべき懐かしい情景の中で、童心に帰ってはしゃぎ回った。

利根川の水源地域に新しい活動フィールドを探していた森林塾青水（以下青水）は、当時の水上町から紹介されたミズナラばかりか、隣接するススキ草原にも心を奪われてしまった。塾の創始者で初代塾長だった清水英毅さんは、この時の様子を「森を探して草原に出会った」と語る。この出会いが、私たち青水による上ノ原の草原再生プロジェクトの始まりである。

上ノ原は、上越新幹線の上毛高原駅から車で約1時間、首都圏の水を支える利根川の最上流部に位置し、標高1050m、面積は21ha、ミズナラを主体とする森林部分とススキ草原がほぼ半分ずつを占める。ほぼ中央を十郎



森林に隣接して草原が再生した最近の上ノ原

太沢が流れ、小規模ながら水源地でもある。

かつては200haの広さがあり、藤原中区集落の人々が屋根葺き用の茅や刈敷き・刈干しなど農業資材の採取地、燃料用の薪炭林として、入会利用していた場所であった。しかし、ここ40～50年で住宅は屋根茅を必要としなくなり、生活様式や農法の変化、石油やガスの普及によるエネルギー革命を経て、集落による組織的な利用と管理はなされなくなった。さらに戦後の拡大造林（カラマツ）や高度経済成長期のリゾート開発によって、周囲の景観も大きく変貌していった。

青水は2000年9月に発足した任意団体で、当初はサンワみどり基金（現三菱UFJ環境財団）「水源の森」（みなかみ町藤原湯ノ小屋）において森林観察などの活動をしていた。縁あって旧水上町から遊休町有地の利用を要請され、元入会地である上ノ原茅場と出会った。そして「入会地・入会慣行の本質は持続的利用のお手本である」と考えて、「現代版入会」を茅場再生活動で実践することとした。

日本列島の草原は、人の手が入らなくなれば、自然と森林に移行する。活動開始当初の上ノ原は、草原の趣をかるうじて残していたものの、タニウツギやシラカバ、イタヤカエデなどの樹



出会った頃の上ノ原。草原の一部にかなりの樹木が侵入していた

木があちこちに侵入し、森林化が進行している状態であった。それを見たメンバーの一人、海老沢秀夫さんが「生き物たちの宝庫である草原が、減少し続けている。草原は生物多様性のホットスポットだ」と力説したことから、生物多様性の保全も活動の大きな柱とした。

2003年4月に旧水上町と青水の間で町有地の無償借地契約を締結し、「入会の森」と命名した上ノ原の茅場再生に着手して以来、現在に至るまでの13年間、活動を継続している。青水が野焼き（火入れ）や茅刈りなどを復活させた上ノ原の景観は、規模こそ小さいながらも、往年の茅場に近いものに戻りつつあると自負している。

発足当時20人程度であった会員数は2015年4月時点で、個人72人、企業・団体10社。首都圏を主体とする会員、地元藤原、みなかみ町など多くの人の志に支えられて茅場再生活動が継続されている。 **塾長・草野洋**

約40年ぶりに復活させた野焼きと茅刈り 伝統的手法を守りながらのボランティア活動

ススキ草原(茅場)の再生には、野焼き(火入れ)と茅刈りが不可欠である。2004年4月、群馬県みなかみ町藤原の上ノ原で古老たちの指導の下、約40年ぶりの野焼きを復活させた。

1965年頃が最後となっていた野焼きは「雪間を焼く」と称し、積雪3mにもなる藤原独特の方法である。残雪を防火帯としながら、雪が消えた所から小まめに火を着ける。地元の人が行うには実施日を柔軟に決められて便利だが、都市住民が会員の森林塾青水が何度も通うのは難しい。加えて、みなかみ町火入れ条例では計画的かつ安全な実施が許可の条件であることから、伝統的手法を守りながらも1日で終えるようにしている。

この野焼きは青水が主催して一般のボランティアを募り、地元が実技指導と消防団の待機に当たり、町役場も職員を派遣するという三位一体で行われる。基本的には、まず4月初旬、茅株を傷めないようにある程度の雪を残して茅場を重機で除雪し、周囲には防火帯となる雪山を築く。残した雪が



秋には背丈を超えるまでに育ったススキを刈り取る

消えた後に1週間ほどの乾燥期間をおき、週末に野焼きを行う。悩みは天候の読みと、重機による除雪と雪山造成の費用であるが、昨春までに10回を数え、今では地域の「春の風物詩」として定着している。

一方の茅刈りは、2003年から実施している。刈った茅を持ち出す目的は、富栄養化の防止と、ススキの成長促進、そして屋根葺き資材としての有効利用である。初霜後の10月下旬の週末、ボランティア30人程度と地元の茅刈衆3～4人で着手し、茅刈衆は、この後2週間ほど刈り続ける。刈った茅束は5束1組を「1ポッチ」として、3週間ほど寒風にさらして乾燥させる。毎年、古民家1棟の屋根替えに必要とされる5000束の半分程度を産出している。

茅刈衆の茅は、伝統的建築物の修復に当たる株式会社町田工業(群馬県中之条町)に買い取ってもらう。価格は1束100円で、1人当たり10万円ほどの現金収入になっている。2011年からは茅刈りの促進と担い手対策のため、環境保全作業協力金をPES(Payments for Ecosystem Services、生態系サービスへの支払い)と位置づけて、1束につき25～



まだ雪の残る茅場での野焼き。炎は地をはうように進む

50円上乗せしている。ボランティアが刈った茅は、地元の国指定重要有形民俗文化財「雲越家住宅」や鎮守・諏訪神社の屋根替え用等に無償譲渡し、倉庫にストックされている。東日本大震災後の2011年7月には、福島県会津若松市内に建てられた木造仮設住宅の屋根の断熱材にこのストック茅が使われ、微力ながら復興に貢献できた。

2010年には世界初と自負する「茅刈り検定」を創設した。検定項目は知識・技術・安全・能率に関する17項目で、全項目をクリアすれば地元古老たちの技術水準に近い「茅刈士」、15項目以上なら「茅刈士補」に認定する。これまでに4回実施して7人の茅刈士補が誕生した。

せっかく刈った茅も運び出さないと世の中の役に立たない。運び出しは、初冠雪に見舞われる11月中旬頃、ボランティアと地元の人で行っている。

塾長・草野洋

人と生き物がにぎわう入会地を目指して その先にある流域ネットワークの形成

森林塾青水の合言葉は「飲水思源」である。その意味は、“水を飲む時はその源に思いを馳せる”であり、設立当初から都会人の独り善がりでない活動を心がけ、地元（群馬県みなかみ町藤原）と協働して地域資源を発掘してきた。その一つが、かつて生活道だった3本の古道の再生だ。今ではフットパスとして、民宿などが行うハイキングのコースに利用されている。昨年度からは、地域の古老たちから話を聞く車座講座を始めた。話題は、山菜、茅葺き、奥利根の自然などにわたり、藤原の人々の生き方と生活の知恵を学んでいる。

青水が行ってきた茅場再生は、ただ懐かしい草原景観を取り戻すだけではなく、地域住民が継承してきた伝統的技術や文化を取り入れながら行っており、それが自然再生事業の本来の姿と考えている。日本の草原は明治時代

には国土の3割を占めていたが、現在では1%以下となっている。上ノ原は人々の営みがつくった貴重な半自然草原であり、文化資産としての価値を保ちつつ、そこに生息する生物の多様性も保全されている。

上ノ原の昆虫相を3年にわたって調査した、株式会社ブレック研究所の山崎裕志氏からは、チョウ類、ハムシ類、カミキリムシ類、カメムシ類、ゾウムシ類など782種が確認され、調査が進めばもっと増える、との報告をいただいた。上ノ原はススキ草原とミズナラ林が隣接し、林縁部、防火帯、管理道など様々な環境がある。食草となる植物や花粉源・蜜源となる花も多し。人による利用と管理が適度になされたことで多様な環境が生まれ、多様な動植物の生育・生息地として好適な環境となったのである。上ノ原は「人と生き物がにぎわう入会地」になりつつある。上ノ原は、みなかみ町が2011年に制定した「生物多様性を守るための昆虫等保護条例」の対象地区の一つに指定され、2015年12月には環境省の「生物多様性保全上重要な里地里山」（500カ所）にも選定された。

青水の課題の一つは、会員と地元担い手の高齢化に対応して、世代交代の道筋をつけることである。近年、都会から藤原地区へ移住し、青水の活動に興味を示す若者が増えており、今後の担い手として大いに期待している。将来は茅場の管理を地元の地域おこしNPOに任せて、青水はそれを川下から支援する体制を目指していきたい。

二つめは、地元との価値観の共有である。青水の会員にとって、自然の中での労働や、植物・昆虫とのふれあいは、楽しみであり喜びとなっている。再生した茅場が新たな観光資源となったことは町から歓迎されてはいるが、これまで協力してくれた人たちは別として、地元の一般住民から広い理解を得られているかという点、まだ難しい。上ノ原で採取される茅のブランド化などで、もっと地元を受け入れられる団体となるよう努めていきたい。

克服しなければならない課題は多いが、上ノ原に出会った当時のメンバーのDNAが引き継がれ、今後も上ノ原入会の森が利根川流域の「タカラ」となるように活動を継続していく。そして、その先に目指すのは流域ネットワークの形成である。利根川の恩恵を受ける流域全体が、「利根川つながり」によって支え合い、協力し合う関係を築くことができれば、それは現代版 commons（自然資源の共同管理）の新しい姿になるであろうと思っている。

塾長・草野洋



上ノ原で見られるヒメジミ。草原や林縁を好んで暮らすこのチョウを、再生した茅場のシンボル昆虫に位置付けようと考えている